ケアマネジャーに知ってほしい！

用具と専門職の力で在宅介護はもっと快適で、幸せになる

東京都大田区で様々な在宅介護サービスを展開している株式会社カラーズ（田尻久美子代表取締役社長）。介護保険事業の中で福祉用具は、訪問介護と並んで自立支援のための主力サービスと位置付けている。福祉用具を使えば自分の意思で生活をデザインできる。ヘルパーに頼らず在宅生活を長く続けている利用者も数多くいるという。

取材協力▶
田尻 久美子 さん ◉ 株式会社カラーズ　代表取締役社長
飯沼　勉 さん ◉ 同福祉用具事業部　福祉用具専門相談員
代永（よなが）　裕樹 さん ◉ 同福祉用具事業部　福祉用具専門相談員　作業療法士

左から代永さん、田尻さん、飯沼さん。カラーズは保険外でも様々な在宅支援サービスを提供している

自分の意思で行きたい場所に リフトは在宅介護の強い味方

「今日は天気がいいから散歩に行こう。行きつけの喫茶店でコーヒーも飲もうかな、、、。その日その時の気分でやりたいことをする、行きたい場所に行く。介護が必要になってもそんな当たり前の生活を続けることができるのが、福祉用具の最大の魅力だと思います」

カラーズで福祉用具サービスを担当する飯沼勉さんと代永裕樹さんは、そう口を揃える。

同社は8年前、従来から手掛けていた訪問介護と居宅介護支援事業に加え、福祉用具事業部を立ち上げた。介護が必要になって介護保険を利用することになったとたん、外出先はケアプランにのっかったデイサービスだけになってしまう――。そんな状況が当たり前のようになっていることに疑問を感じたからだ。現在は飯沼さんと代永さんを含む5人の福祉用具専門相談員を抱え、在宅支援の主力と位置付けて福祉用具サービスに力を入れている。

福祉用具と言ってもその種類や数は限りなく豊富にあるが、飯沼さんたちが在宅介護生活でもっと活用してもらいたいと思っているものの1つは、リフトだという。

「移乗や移動は自立の原点ですが、介助の負担はやはり一番大きい。リフトやスライディングボードを積極的に提案するケアマネジャーさんは、あまり多くはないのが現実です。操作が難しいのではないか、とか、そもそも機械で人を吊り上げることに抵抗を感じる人も少なくないようです」（飯沼さん）

そんな懸念を払しょくするような事例を教えてくれた。

80歳の要介護の父親を40歳代の娘さんが在宅で介護していた事例だ。デイサービスのほか定期的な通院が必要だったが、体格のいい父親のため車いすに移乗しての外出介助はかなりの負担になっていたという。飯沼さんは、父親

気ままに外出を！リフトや昇降機の提案・活用事例

◀①　公道に隣接する寝室のベッドから、公道に予め置いた車いすにリフトで移乗している事例。吊り具（スリングシート）をベッド上で敷き込み、１人介助でベッドから掃き出し窓へリフトで移乗し、車いすに直接乗り込む。

▶②　こちらは寝室で車いすに乗り、そのままスロープと電動昇降機（くくりはリフト）を使って、掃き出し窓から１人介助で外出しているパターン。

の寝室の窓を開けるとすぐに公道に面している住環境を生かし、予め公道に車いすを置いておき、ベッドから掃き出し窓へリフトで移乗し、直接車いすに乗り込むことを提案。すると娘さん1人だけで移乗介助ができ、通院だけでなく散歩にも頻繁に出かけるようになった（写真①）。

「そんな在宅生活を1年半くらい続けましたが、何より、気が向いたときに車いすに乗り、家族で好きなところへ出かけられるようになったことが嬉しかったですね」（飯沼さん）

冒頭の言葉を裏付けるエピソードだ。初めて使うリフトも使い方を丁寧に説明し、実際に利用してみると安全で安心できるものであることをすぐに理解してくれたという。こうした事例は1つや2つではない。飯沼さんによると、日本の住宅事情は狭くて段差が多いところが少なくないため、リフトのほか電動昇降機などをスロープと組み合わせると格段に移動が楽になるケースも多くあるという（写真②）。

また、リフトよりも手軽で安価なスライディングボード（p25、写真③）もお勧めだ。

「ある利用者さんは導尿カテーテル、中心静脈カテーテルを付け、さらに在宅酸素も必要になり生きる気力を失いかけていたのですが、スライディングボードを何度も練習を重ねて息子さん1人で移乗ができるようになると、美味しいものを食べたい、外出したいと、ぐんぐん意欲が増していったのです」（飯沼さん）

本人や家族が喜ぶ姿を見て、退院に合わせたケアプラン作成にまず福祉用具の検討を依頼してくる外部のケアマネジャーも増えてきたという。ちなみに最初の事例で使用したリフトの介護報酬単位は、月3500単位。スライディングボードにいたってはたったの100単位だ。コストの面でも福祉用具の活用を積極的に検討する価値は大きいと言えるだろう。

基本軸はICF、「普通の生活」に共通認識を

このように、福祉用具は在宅介護生活を豊かに長続きさせ、自立支援にも有効な選択肢である。だが、それは単に「モノ」の力だけではない。福祉用具に精通するプロ、つまり「人」によるサービスとの融合があってこその効果だ。言い換えれば福祉用具専門相談員の存在意義である。

「ヘルパーなど人によるサービスと同じように、福祉用具や住環境整備にも、本人自身の力でできることを奪ってしまうリスクがあるのです。特に在宅は、転倒しないようになど安全を過度に優先して動かなくなってしまうことも。活動量が減らないよう留意しています」（代永さん）

実際、家族を含めた担当者会議で「安全な生活」とい

う目標になり、福祉用具を導入した結果、楽になり過ぎて日課にしていたこともしなくなってしまったという例もあったという。どんなに万全を期してもリスクはゼロにならない。それが「普通の生活」だし、多少不便で時間がかかっても自分の力でできるに越したことはない。当たり前とは何か、自立支援とは何かを、在宅支援にかかわる全ての専門職が共通認識を持つことが重要だと、代永さんは話す。

「やはり軸となるのはICFの『活動と参加』だと思います。家庭の中でも地域の中でも自分の力でできることを増やし、役割を持つ。福祉用具専門相談員はそれを実現するための環境をどうつくるか、目標を設定し、その人に合った福祉用具を選定するところから関わっていくことができる専門職です」(代永さん)

〝業者さん〟ではなく、チームの一員！専門相談員の発信力強化も必要

在宅ケアの質を大きく左右するほど、多職種連携が重視される現在。だが、残念ながら福祉用具専門相談員は他の職種に比べ格下のように見られることが多い。

社長の田尻久美子さんは「福祉用具事業を始めてから、地元では福祉用具の重要性や福祉用具専門相談員の専門性を理解してくれる事業者が増えています。そこを理解してくださる他社のケアマネジャーからの依頼も多いです。

でも全国的に見れば、専門相談員を〝モノを搬入する業者さん〟としか認識していない人も少なくありません。そこをどう変えていくかが課題だと思っています」と、悔しさをにじませる。サービス担当者会議で声すらかからない、とぼやく専門相談員の声も見聞きするという。

ただ、専門相談員の質にバラつきがあるのは事実だ。

「アセスメントもせず、ケアマネジャーに指定された用具を搬入して終わり、という専門相談員もいます。車いすをレンタルしてほしいと言われても、本当にその人には車いすが必要なのか、といったところから評価して、選定の理由をきちんと納得できるように説明する。そして利用開始しても絶えずモニタリングして必要に応じて見直していく。効果測定まで行うことが全国で標準化しなければ、専門相談員に対する評価は低いままで地位も向上していかないでしょう」

③ スライディングボード。価格も安く、もっと活用してもらいたい移乗用具

飯沼さんと代永さんは厳しく自己評価する。介護保険の福祉用具レンタルでは定期的なモニタリングが必要とされているが、頻度は事業者任せ。だが、飯沼さんらはこまめに自宅を訪問し、導入した福祉用具が適切に利用されているか、効果を発揮しているか確認しているという。時には自宅だけでなく、車いすのレンタルの場合などは、利用者が通っているデイサービスなどにも足を運ぶ。正しい姿勢が保たれているかが生活動作や二次障害などに大きく影響するからだ。

「様々な生活場面での状況を確認し続けることが重要なのです。病気の進行などはもちろんですが、介護する家族にも変化があればそれに合わせて調整が必要になります。身近な人が亡くなるなども、用具の見直しのタイミングになることも多いのです」(代永さん)

生活をまるごと見るという姿勢を持ち続けること。それがカラーズの福祉用具サービスへの信頼と高い評価に結びついているのだろう。

「専門相談員を含めてケアチームとして、もっと病状や生活情報を共有できるといいと思います。そういう情報連携が強まれば、在宅介護はさらに快適で豊かになると思います。そして専門相談員も福祉用具の有効性を評価し、発信していく努力をしていくことが重要だと思います」(飯沼さん)

現在、カラーズではなんと車いすの開発にも取り組んでいる。数年前、車いすを使う老夫婦が傾斜している道路に苦慮して外出することを諦めてしまったという話に胸を痛めた田尻さんが、地元の町工場に掛け合い、力の弱い人でもまっすぐに進める車いすの開発協力を依頼。試作を重ね、製品化の最終段階までたどり着いたところだ。

その名も「直進軽快車いす」。傾斜のある道をたとえ片手で押したとしても片流れせず、スイスイと真っすぐ進む。誰もが驚きの声を上げるほど、まるで魔法のような車いすだ。そんなチャレンジにも同社の在宅支援に対する熱い思いが溢れているのが分かるだろう。

「ささやかな楽しみが続けられること。それが実は生きていく上で最も大きなモチベーションになるのではないでしょうか。在宅介護事業者として地域の人たちのニーズに真摯に向き合っていきたい」(田尻さん)